

1 学習に取り組んでいる主な分野

<input checked="" type="checkbox"/> 生物多様性	<input checked="" type="checkbox"/> 海洋	<input type="checkbox"/> 防災・減災	<input checked="" type="checkbox"/> 気候変動
<input type="checkbox"/> エネルギー	<input checked="" type="checkbox"/> 環境	<input type="checkbox"/> 文化多様性	<input checked="" type="checkbox"/> 世界遺産・文化財
<input type="checkbox"/> 国際理解	<input type="checkbox"/> 平和	<input type="checkbox"/> 人権	<input type="checkbox"/> ジェンダー平等
<input type="checkbox"/> 福祉	<input type="checkbox"/> 生産と消費	<input type="checkbox"/> その他 ()	

2 ユネスコスクールとしての活動の概要

本校の学校教育目標は、「ともに未来を築く、心豊かで、かしこくたくましい子どもの育成」である。

有明海に面した地域特性を活かし、特色ある教育活動として「海洋教育」及び「防災・減災教育」を推進している。総合的な学習の時間を軸として、①自然に親しみ生命を尊ぶ学習、②環境保全への探究と発信に関する学習、③地域の安全を守る実践的な学習について、各学年の児童の発達段階に応じて系統的に取り組んでいる。これらの学びを通し、持続可能な未来を創造する力の育成に努めている。



3 特徴的な活動事例の紹介

○ 「海に親しむ」「海を知る」「海を守る」「海を利用する」学習

低・中学年においては、自然への感化と理解に重点を置いた。1・2年生は生活科を中心に、近隣の公園での観察や栽培活動を行った。身近な自然に触れる中で、生命の尊さを実感し、自然を愛でる心を育むことができた。

3年生は地域の宝である有明海の干潟を訪れ、外部講師の案内で多様な生物に直接触れる観察会を行った。生物多様性の豊かさを肌で感じることで、環境保護への関心を高める貴重な機会となった。

4年生は、単元「川と海のつながり」にて、カヌー体験を通じた環境学習を行った。諏訪川から海へと漕ぎ出す中で、川を全身で体感したが、同時に海水の汚れや漂着ゴミという厳しい現実



けることとなった。社会科で学んだ「健康なくらしとまちづくり」と関連付けながら、自分たちの暮らしが海へ与える影響について深く考え、環境保全の切実な必要性を自ら見出す契機となった。

5年生は、単元「三池港から未来へ」にて、世界遺産である三池港の調査を行った。地域の誇りである港の歴史や機能を学ぶとともに、直面しているゴミ問題の解決に向けて「啓発新聞」を作成した。学んだ魅力を下学年へ発信することで、自分たちの地域をより良くしようとする主体的な姿勢を養った。環境保全を地域社会へ強く訴える、実践的な地域貢献の在り方を学ぶ活動となった。



○ 防災・減災教育

第6学年では、海洋教育での学びを土台に、さらに一步進んだ「防災・減災教育」を実施した。過去の豪雨災害の事例から自然の脅威を再認識し、簡易テントの設営やハザードマップを用いた地域特性の確認を通して、自分たちの住む地域の危険性と避難行動の重要性を具体的に把握した。



3 今後の活動計画

1. カリキュラムの改善と「海との共生」

低学年の自然体験（公園・プール）から、中学年の生物多様性・流域調査（干潟・カヌー）、高学年の課題解決（クリーン活動・他地域交流・防災）へと至る系統的な学びを展開する。単なる体験に留めず、日常生活と海との相関を意識させることで、環境保全への自分事化を図る。

2. 相手意識を明確にした発信活動の充実

5年生の魅力発信や6年生の交流学习において、「誰に・何のために」伝えるかを明確に設定させる。デジタルツールや地域掲示など、相手に応じた多様な発信方法を主体的に選択させ、社会参画への意欲と自己有用感を高める。

3. 教師の協働と組織的な推進体制

育成すべき資質・能力を全教員で共有し、学年を跨いだ学びの連続性を意識する。教師は「教え手」ではなく、子どもと共に問い、学ぶ「探究の伴走者」としての役割を担い、小・中連携や地域との接続を強化した組織的な指導體制を推進する。